

〈講演〉

## ゲーテと現代

森 淑 仁

本日は、ゲーテにつきましてお話しさせていただく機会を得まして、たいへん有難く存じております。

こちらの文学部の三指針である「生命の尊重」, 「世界市民」, そして「人間中心主義」の基本理念につきまして, 「ゲーテと現代」というテーマで, 「詩人ゲーテ——その自然研究の本質——」ということの基本ともというべきところをお話しさせていただきたいと思えます。

さて、ゲーテについて皆さんは、様々の戯曲、小説、例えば「ファウスト」とか「若いウェルテルの悩み」といった作品でもおなじみかと存じます。ゲーテということですぐに思い浮かびますのは、今も申し上げましたように、まずは「詩人」としてのイメージであります。しかしながらゲーテは、ワイマル公国、正確にはザクセン＝ワイマル＝アイゼナハ公国といいますが、そこで、10年以上、政治家として奔走しました。ワイマルの君主である、カール・アウグスト（1757-1828）の信任を得て、政治に携り、政治改革を行います。ワイマル公国といいましても、当時300以上ありましたドイツの領邦国家の一つで、決して大きくはなく、人口10万余、面積は、2000平方キロですので、東京都より小さく、首都であるワイマルの人口は約六千ですが、ゲーテは、「道路建築局長」, 「財務長官」, 「軍事委員長」等々として活躍をします。また、イルメナウ地区の鉱山、銀と銅が出ますが、一時廃山となってしまったところを、財政上の建て直しということで、その再開発を手がけます。そして

(2)

彼は、地質学の研究を同時に行いながら、並々ならぬ力をかたむけますが、10年ほどして結局、落盤にあつて失敗をしてしまいます。しかし、「ウエルテルの悩み」で一躍有名となった詩人ゲーテが、20代の後半にワイマルへ行き、このような活動を通じて、多方面の広い視野を養ったと言えると思います。ゲーテは後年、「われわれドイツ人は、われわれを取りまく周囲のせまい圏域の外へ目を向けないならば、たやすく、ペダンチックなうぬぼれに陥ってしまう」(Houben 174, 対話(上) 292 参照)と語っていますが、ゲーテがワイマルという小国にありながら、自らを、そしてドイツ人を反省的に考察するに至ったことに注目したいと思います。

ゲーテはライフワークの『ファウスト』の終わりで、理想的な社会、「自由な土地に、自由な人々と共に住みたい」(HA3, 348; 潮 3, 351 参照)といった理想的な世界を思い描くところにまで、広く目を向けていくようになりました。晩年ゲーテは、アメリカ合衆国——その頃は、アメリカ合衆国は、理想的な国としてヨーロッパの人々にも思い浮かべられましたが——アメリカ合衆国について、次のように語っています。「自然がすでにきわめてゆったりした、また安全な港を形成している太平洋の岸辺全体に、次第に、きわめて重要な商業都市が生まれ、中国、東インドそして合衆国との間の大きな公益の仲介をするであろう」と。そしてパナマ運河にも言及し、「(アメリカ)合衆国は、やメキシコ湾から太平洋へ通ずる横断路を必ずやり遂げる」であろう、「それを私は身をもって体験したいものだ」と、それから、「ドナウ川のライン川とのつながり」、これも大事業だが、「ドイツの財力を考慮すると」なかなかできない相談であろう、と。スエズ運河のことも取り上げ、「この三つの大きな事業」が出来上がったのを身をもって体験できるなら、「もう50年ばかり」がんばって生きるのもそれなりのし甲斐があろうとも語っています。(Houben 454f.; 対話(下) 108-109 参照) スエズ運河、パナマ運河の完成は、ゲーテの時代からかなり経っていますので、このような広い視野を持ち得たということはまさに驚きだと思います。

こうした晩年のゲーテの発言に関しまして、かつてトーマス・マン(1875-

1955), —彼は20世紀のゲーテを自負する作家といえますが—彼は、『市民時代の代表者としてのゲーテ』と題する講演において次のように述べています。「彼(ゲーテ)は、地球上全体に目を走らせていました。自分の国にだけ限定されていませんでした。彼の未来への期待感には、広大で世界全体という広がりが必要でした。他の国の人々の生活の向上、幸福あるいは痛みは、彼にとって、自国の人々の運命と同じく彼の心を動かすものでした」と。そしてさらに、「この精神は、自由がとりわけ偉大なものであることを知っていました。また、<世界文学>の告知も、これと同じ精神のあり方に由来しました」と。(ThMann, 37; Th マン 66 参照) ここでトーマス・マンが言及したゲーテの「世界文学」とはどういうことかをこれからお話しをしたいと思います。先ほど触れました「ドイツ人がペダンチックなうぬぼれ」に陥らないように、他の国々の人々の文学に目を向けなくてはならない、そうした他との交流を通じて、おのれの存在を振り返り、自己の特殊性を自覚しつつ、決してペダンチックな独りよがりのものではなく、人類の共有の財産となるに至るまでに深化、発展に努めるべきこととして、特に晩年のゲーテが折に触れて述べているのがこの「世界文学」であります。それはまさにゲーテの「世界文化」論であり、ゲーテにおける「世界市民性」を内容とするものということができます。

ゲーテの「世界文学論」に関してとりわけひきあいに出されるのが、イギリスの若いトーマス・カーライル(1795-1881, ゲーテやシラー等のドイツ文学の紹介者でもあります)宛のゲーテの書簡です。そこにはほぼ次のようなことが書かれています。(HAB4, 236f.; 潮 15, 232-233 参照)「どの国でもその国の最も優れた詩人たちならびに創作者たちの努力は、はるか昔から、普遍的人間なものへ向けられて」おり、「個々の特殊なもの、それが歴史的にであれ神話的にであれ、どれをとっても、その中から国民性や個性を通じて、その普遍的なものがますますもれ輝きでる」もので、「それぞれの国民の特性を知り」それぞれの「国民の特性を認め」、「交流」の場を開くべきであること、そして、「真に普遍的寛容が最も確実に達せられるのは、人が、個々

(4)

の人間ならびに民族の特殊性をそのまま認めながら、しかも、真の功績は、それが全人類の所有になることによって始めて顕彰されるという確信を保持する場合である」と。ところで、ゲーテの生涯は、非常に騒がしい時代であり、戦争に明け暮れたと申しますと大げさかもしれませんが、生まれて間もなく七年戦争があり、またオーストリアとプロイセンとの角逐、フランス革命、ナポレオン戦争、そしてメッテルニッヒ体制等、時代は騒がしく変貌を遂げていきます。1800年前後10年ぐらいは、講和により穏やかな時代でありましたが、こうした騒がしい戦乱の相次ぐ時代について、カーライル宛の同じ書簡にも次のような記述があります。世界文学、世界文化の理念が行き渡り、つまり「現実の人生においても」、「国民性や個性を通じて、その普遍的なものがますます輝き」、そうしたことが支配し、「地上のあらゆる粗野なもの、野蛮なもの、残酷なもの、虚偽的なもの、利己的なもの、欺瞞的なもの」の間を縫って、至るところで、多少でも和やかさを広げようとしている」ゆえに、「あまねき平和が始まることを望むことはできないが、避けられない紛糾も次第に穏やかなものとなり」、戦争が残酷なものになっていくのを抑えることができ、「勝利の驕り高ぶりが少なくなることを望むことはできる」と。先ほどのトーマス・マンの言葉にありますように「世界全体」、つまり「人類全体」へ目を向け、個々の文化圏のそれぞれの価値を認め、それぞれの文化の独自の多面的で本質的な発展を可能にする全人類的な視座の確立こそ肝要であることが、平和を希求するゲーテにおいて提言されていると言えましょう。この全人類の視座をゲーテは「人類全体にしてはじめて自然を認識し、人類全体にしてはじめて人間的なものを生きる」(HAB2, 343)とも語っています。

こうした世界「文学論」という言い方で表現された「文化論」を通じて語られる、普遍的なものへの努力は、当然ながら、ゲーテの作品の創造活動ならびに自然科学研究にも通底しております。ではゲーテの創作活動はどういうものであったのか、その基本となるものが次のような言葉に現れています。

「ある種の大きなモチーフ、聖譚、太古からの伝承が、私の心にきわめて深く入り込むので、それらを、40年から50年、生き生きと活動的に内部に止めおいた。こうした価値ある形象が、しばしば想像力において新にされるのを見ることは、この上なくすばらしい財産であるように思われた。なぜならば、事実それらは、なるほど常に形を変えるが、別のものになるのではなくさらに純粋な形式、さらに決定的な表現へと熟していくからである」と。(HA 13, 38; 潮 14, 17 参照)そして彼は、「何らかの現象の由来と結合の秘密を解くことができず、手付かずにしておかなかった場合でも、何年かの後に、突然一切が、その蒙を啓かれ、この上なく美しい連関において見出された」と。(HA 13, 40f.; 潮 14, 19 参照)こうした美しい連関の核になるもののことを、ゲーテは、「簡潔にして含蓄に富む点」(ein prägnanter Punkt)と呼び、「それを見出すまでは休息しない」と語ります。(HA13, 40; 潮 14, 19 参照)これは、「いろいろなことが引き出される、あるいはいろいろなことを自発的に自ら生み出し運び出してくれる」点であり、いわば座標の原点であります。この「簡潔な含蓄に富んだ点」は、ゲーテの創作活動、また自然研究を通じてのまさにキーポイントです。

では芸術についてどうかと申しますと、こうした美しい連関において形象化される美しい芸術作品の最高のものに対して、それは、「認識の最も内奥の根底、つまり、目に見え、把握できる形態において認識することが許されている限りでの事物の本質に基づく」ものであると語ります。(HA 12, 32; 潮 13, 124 参照)ゲーテの芸術概念をより一層明確にするものとして、次のような詩句があります「自然は、たくさんの姿をとって／一つの神を表わすに過ぎないように、／広い芸術の野には、／永遠なるものの一つの意こころが働いている。／それは真理の意こころであり／それは美によってのみ飾られる」と。(HA 8, 255; 潮 8, 217 参照)つまり、「目に見え、把握できる形態において認識することが許されている限りでの事物の本質に基づく」芸術の形象は、「永遠なるもの」、「真理」が内在している美的形象であるということです。また、「美は、秘められた自然法則の表示である。それは美として現れないならば永遠

(6)

に隠されたままであろう」(HA12, 467; 潮 13, 308 参照)とも語られます。美は単なる趣味の問題ではなく、ゲーテにおいては認識の根本契機であること、このことに留意する必要があります。もちろんこれは、主観的なものに過ぎないと片付けることはできません。ゲーテの言葉に即して言いますと、「直観、知、予感、信仰、その他われわれが万有を探る触角のすべて」が「協働」(Vgl. HAB4, 231f.) してなされる活動です。

こうした主観的なものが、「一なる永遠なるもの」、「真理」、つまり普遍的なもの、客観的なものを個別の形態において担い行きます。それはまた、個々の文化へと敷衍され、普遍的なものへと努力していく「世界文学の理念」においても肝要である、同様の個と普遍の問題に関わるのです。個々の活動は、個別の立脚点にありながら、それは普遍的なものへと高まり、現象における真なるものを旨とする生産的営為であるということが出来ます。これはゲーテの自然研究にも通底し、「主観的視点においてみることを「科学的研究の新しい領域として初めて本来の意味において発見し、この領域の基本的法則をはじめて確定した」(拙訳 141) とも評価されます。ここでは主観的なものがむしろ客観的なものであるわけです。これは、20 世紀の最大の哲学者の一人であるエルンスト・カッシーラー (1874-1945) の言葉です。

ここでゲーテの自然研究についてこうしたことのありようを見ていきたいと思えます。様々の分野はありますが、とりわけ「植物学」と「色彩論」を中心にしたいと思えます。

ゲーテは11年間ほどワイマルで鋭意政治改革に携った後、1786年から2年ほどイタリア旅行をします。イタリアでは美術の鑑賞もさることながら、明るく澄んだイタリアにおいて、植物の観察にも余念なく、次のように記します。「ここでのこうした新に現れてくる多様性の中で、一切の植物形態をもしかしたら一つの形態から発展せしめることができるという考えがますますいきいきしたものになってくる」と。(HA 11, 60; 潮 11, 48 参照) この「一つの形態」は、植物形態観察における座標の原点、「含蓄に富んだ点」であり、

これを核に、植物の世界全体が生き生きと広がっていることを意味していることはいうまでもありません。ゲーテは、この植物の有機体の「生成と変成」(HA13, 27; 潮 14, 8 参照)<sup>1</sup>の基本形態である一つの植物形態、つまり基本植物を「原植物」と呼び、イタリア旅行において次のように述べています。「原植物は、世界のこの上なく見事な被造物で、それについて自然自身が私をうらやむべきものである。こうしたモデルとそのための鍵をもって必然的に一貫性をもった様々の植物をさらに無限にあみだすことができる。つまりそれらは、実在していなくとも、やはり実在しうるであろうもので、絵画や詩的影や仮像といったものではなく、一なる内的真理と必然性を持っている。これと同じ法則は、一切の生きた他のものに適用されうるであろう」と。(HAB2, 60; 潮 15, 94 参照) ; (HA11, 324; 潮 11, 264 参照) ; (HA11, 375; 潮 11, 309 参照)

そしてゲーテは、ワイマルに帰ってから 1790 年に『植物変態(試)論』を脱稿します。そこでは、この原植物という言葉は使われず、原植物は、それぞれの植物の基本形態ですが、今度は、植物のメタモルフォーゼ、つまり植物が変態を遂げていく基本となる器官を原器官(Urorgan)として、それを「葉」において直観するのです。「(植物における)同一の器官が多様に変化してわれわれに示す活動を、<植物の変態>」と呼び、「自然の歩みをできるだけ入念に追っていき」、「植物の外的形態に、その変化のすべてにおいて、つまり種子の展開から、種子の新しい形成に至るまで随伴」し、「植物が同一の器官を次第に変化形成させる諸力の発現に注意を向け」、「すべての形態を葉から」引き出した、と。(HA13, 89f.; 潮 14, 91 参照) その際、「自然の活動の第一の原動力を発見しようという不遜さ」はないことを明確にしております。これがまた肝心なことですが、ファウストの最初の認識衝動が、この世界の奥の奥ですべているものを認識しようとしたのとは違い、人間に相応しいあり方で植物の基本形態を葉において直観するわけです。これは、自然の外にあるものではなく、現前の自然を超えたものではありませんが、決して自然外のものではなく、自然に内在しているものを、原器官として、「葉」として直観するのです。

(8)

『イタリア旅行』にも、先ほどの原植物の記述に続けて、次のように記しています。「私にはっきりしてきたことは、われわれが通常、葉とみなしている植物の器官に、あらゆる形態のうち隠れたり現れたりする (sich offenbaren) ことのできる真のプロテウスが潜んでいるということである。前後を問わず、植物は葉であり、将来の胚芽ときわめて分かちがたく一つとなっているので、他方なしには一方を考えることができないほどである。こうした概念を把握し、保持し、それを自然の中に見つけ出すことは、われわれを苦痛なほどの甘美な状態へと移しいれる課題である」と。(HA11, 375; 潮 11, 309 参照)

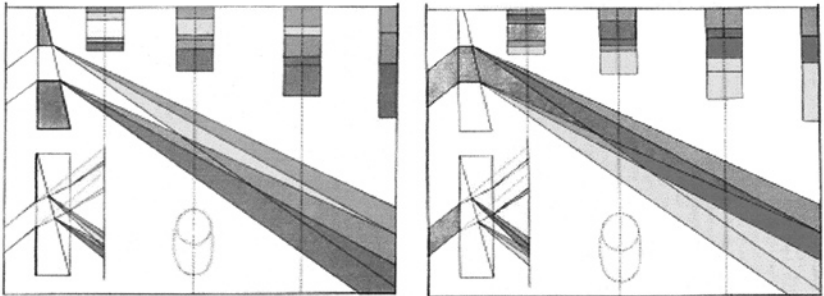
いうまでもなく「原植物」の直観も、同然です。ゲーテは、晩年、この原植物について、次のように述べています。「この上なくかけ離れたところにある植物もはっきりした親和性を持っており、むりなく相互に比較し得る。これらが一つの概念のもとに集められると、私にとって次第にはっきりしてきたことは、この直観は、さらに高度のやり方で生かされうということである。つまり、当時、超感性的な原植物の感性的な形式のもとに念頭に浮かんでいた要求である。私は私の前に現れたすべての植物の形態の変化を追っていった。そして、私の旅の最後の目的地であるシチリア島で、私には、すべての植物の部分の根源的同一性が完全に明らかとなった。そして私は今やこの根源的同一性をいたるところで追求し、また知覚しようとした」と。(HA13, 163f.; 潮 14, 155 参照)「原植物」も、現にそこにあるわけではないのでいわば理念的なものですが、決して単なる理念的なものではなくそこに直観できるものであるわけです。こうした「原植物」、また原器官としての「葉」において、なお注意しておきたいことは、繰り返しになりますが、「自然の活動の第一の原動力を発見しようとする不遜さ」はなく、人間に相応しいあり方で基本的なものを、自然のうちに直観するということです。

そしてゲーテは、大作である『色彩論』、「教示編」、「論争編」そして「歴史編」の三部を 1810 年に公にします。『色彩論』は、「主観的な視点において見ること」が成果をあげているものと言えます。その基本は、屈折率といっ



た数量的に規定されるような「客観的」なものではありません。もともとは、絵画の彩色理論に発するものですが、例えば『色彩論』の中には、ハールツ地方の雪で覆われた山を歩き、日が傾いていくうちにだんだん変わっていく色彩現象、また、見る側の位置によっても変わっていく色彩現象について述べています。こうして主観的ではあるが、客観的なものにまで達する変化を記述しております。(「教示編」の第一編「生理的色彩」参照。HA13, 348; 潮14, 332 参照。)

ここでは、基本的なことを、『色彩論』の第二編「物理的色彩」の記述にしたがって見ていきたいと思います。(HA13, 376f.; 潮14, 354-355 頁参照。)(皆さんにお渡しした白黒のプリントの以下の図は、ゲートの『色彩論』に添えられ、本来はカラーです。)



(潮出版社版『ゲート全集』第14巻、352頁と353頁と間の差込、左から、図V、と図VI)

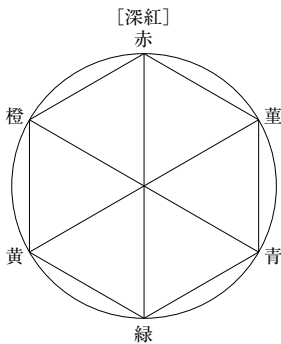
まず黒地に白い細長い帯状のものを置き、その上に、プリズムを掲げ、プリズムを手前のほうに傾けるか、目をずらしますと、色彩が現れます。「暗い境界を明るいものの方へと動かすと、黄色の幅の広いヘリが先行し、幅の狭い橙のフチが境界とともにそれにつづく。明るい境界を暗いものの方へずらすと、幅の広い莖のヘリが先行し、幅の狭いフチがそれにつづく」と。これが、図Vのプリズムの右側のはじめの図に表わされたものです。この色彩の順序は次の通りです：橙・黄・(白い部分)・青・莖。そして、「黄のヘリが青のフチに達すると」黄と青が結合し緑が生ずる。これがプリズムの右

(10)

から2番目に図示されているところでは：橙・黄・緑・青・堇。さらに第三図では、黄は残りますが青は黄に重ね合わさり消えています。さらにまた「次第に、この黄と青が、高度に重なり合い、この両方の色彩が完全に結合して緑となる」と。これは第四の図に示されています：橙・緑・堇。

次に、「白い紙の上に黒い細長い帯状のものを置く」と、まず、上記と同様にして、今度の色彩の順序は次の通りです：青・堇・(黒い部分)・橙・黄。さらに「堇のフチがその白い紙の上に広がり、橙のへりに達するであろう。ここで、間にある黒い部分は、先ほど間にあつた白い部分と同じく消し去られ、そうしてそれに代わって華やかな純粋な赤が現れることとなる。これをわれわれはしばしば深紅という名を持って表してきた。今や色彩の順序は以下の通りである：青・堇・深紅・橙・黄」と。さらにまた、先ほどと同じようにして、今度は堇と橙が、「高度に重なり合い、この両方の色彩が完全に結合して」深紅となると、色彩は、次の三色のみです：青・深紅・黄。

ここでの色彩現象を円環として簡単に表示したものが、次のゲーテの色彩環です。(潮 14, 315)



この色彩環について、『色彩論』の「教示編」の「序論」(HA13, 326; 潮 14, 315 木村直司訳)に、次のように記されています。「とりあえず、最小限のことを述べるならば、色彩を生み出すためには光と闇、明と暗、あるいはより一般的な公式を用いれば、光と光ならざるものが要求される。光の最も近くには黄と呼ばれる色彩が生じ、闇に最も近い他の色彩は青という言葉で表さ

れる。これら二つの色彩は、その最も純粋な状態のまま全く均衡を保つように混合されるならば、緑という第三の色彩を生み出す。最初の二つの色彩はしかしまた、濃度ないし暗度を高められることにより、それぞれ独自に新しい現象を生み出すことができる。それらは赤みを帯びるのであるが、この赤みは、もともと青と黄がもはやその中に認められないほど高進させられることができる。しかしながら最高の純粋な赤は、特に物理的色彩の場合に、橙と堇のそれぞれの末端が一致させられることによって生み出される。これは色彩現象と色彩生成の躍動する光景である」、また「これらの三つないし六つの色彩はたやすく環状に配列されるのであるが、基本的な色彩論が問題にするのはこれらの色彩に限られる。他のすべての無限の変化を有する個々の色彩は、どちらかといえば応用面に、すなわち画家や染物師の技術に、生活そのものに属しているのである」と。

光と闇、明と暗の両ポールをはじめとして、様々の色彩が両極性を担い、それぞれのポールが相互に強められ、高められ高次のものが生じ、こうした「両極性」(Polarität)と「高進(性)」(Steigerung)を通じて、ダイナミックな「生成と変成」の色彩現象の世界が展開しているわけです。なおここで注意すべきことは、この色彩環によって端的に表現されるこうした基本現象は、ゲートの表現に即して言えば、「決して出来上がった、完成した現象ではなく、常に生成しつつ増大している、様々の意味で規定可能な現象としてみなされるべきであることを決して忘れてはならない」ことです。(HA13, 377; 潮 14, 355 参照)ゲートは、色彩現象における基本現象を「原現象」と呼びます。(HA13, 368; 潮 14, 347 参照)

後年ゲートは、自然のダイナミックな「生成と変成」の直観においては、その基をなす二つの「大きな動輪」として、こうした「両極性」と「高進(性)」の直観が不可欠であることを強調しています(HA13, 48; 潮 14, 37 参照)が、ここ『色彩論』において、ゲートの自然観あるいは、ゲートの観想の基本である「両極性」と「高進(性)」が簡明に語られているわけです。ゲートにおいては、このダイナミックな「生成と変成」の色彩現象の世界、それは

また、世界全体のダイナミズムの比喩ともなります。

ゲーテはいたるところに、この両極性を認めます。電機の両極、磁気の両極、光と闇、呼気と吸気、生物の両性、肉体と魂、神と世界、理想と現実、そしてまた、分析と総合、さらには行為と思考、精神と物質等々です。こうした「両極性」と「高進」を、自然の二つの大きな動輪というとき、これから容易に理解されますように、人間もまた自然の「生成と変成」の一翼を担ういわば自然内の存在であるということです。

また、ゲーテ自身、「理念が全体の根底にあり、それに基づいて神が自然において、自然が神において永遠から永遠へと創り働いているという表象を拒むことはできない。直観、考察、熟慮は、われわれをあの神秘 (Geheimnisse) へと近づける。われわれは厚かましくも、理念を試み、謙虚になり、あの始原に類似していると思われる諸概念をつくる」(HA13, 31; 潮 14, 11 参照) と、神即自然の内にある人間存在について語っています。ゲーテの言葉に即して言えば、諸現象は「研究者の直観の前に、一種の有機的組織を形成し、その内的な全体の生を明らかにする」(HA13, 26; 潮 14, 7 参照) もので、ゲーテは、この「生ける秘密に満ちた全体からの発展」を念頭に、「有機的自然の形成と変成を真摯に追究し続け」(HA13, 27; 潮 14, 8 参照)、個々の諸現象を普遍的に担う基本現象を、それぞれの自然研究の領域において、原植物あるいは原現象等として、象徴的に形態連関の内に直観しようとし、それがまさしくゲーテの「自然という書物」を読むこと (Vgl. HAB1, 511) の本質です。

ゲーテの「エビレマ」と題する詩に次のような表現があります。「自然を観察するにあたっては／つねに個をも万象をも重んずるがよい——／なにもものもたんに内部に たんに外部にあるのではない。／なぜなら 内部にあるものとは 外部にあるものなのだ。／だからおこたりなく把握せよ／聖なる公然の秘密をこそ。／——／真実な仮像を歎びとせよ、／そして真摯なたわむれを——／生命あるものは単一ではない、／多様なのだ そのあらわれはつねに」と。(HA1, 358; 潮 1, 331 田口義弘訳) この詩の終わりに「生命あるものは単一ではない、／多様なのだ」とあります。ゲーテの場合、光は絶対

存在で、一なるもの、理念的なもので、即自存在であり、われわれは多様な色彩現象において、われわれに相応しいあり方で光の本質を直観しようとしませんが、「一なるもの」それは現象において、「生命あるもの<sup>いのち</sup>」として、「多様なもの」、「多なるもの」であるわけです。中ほどに「聖なる公然の秘密をこそ」「怠りなく把握せよ」とあります。この「聖なる公然の秘密」という言葉はゲートにとってきわめて重要な内実を有しています。秘密は「公然」としていないから秘密であるわけですが、ゲートにとって秘密は「公然」としている、オープンなのだ、見る目のある人が見れば、われわれにとって相応しいあり方で秘密の本質は直観できるのだ、ということです。したがって「見る目を養え」というのがゲートの人間観、いわば教育観でもあるわけです。

この「聖なる公然の秘密を把握せよ」との言葉の前に、「なにものもたんに内部に たんに外部にあるのではない。／なぜなら 内部にあるものとは 外部にあるものなのだ」とあります。このことの中身を『色彩論』の中のゲートの言葉に即して見ていきますと、『色彩論』の「序」には次のように述べられています。「目は、その存在を光に感謝しなくてはならない。未発達の動物の補助機関から、光は、光と同じようなものとなる器官を呼び出す。こうして目は、光において、光のために形作られる、つまり、内部の光が外部の光を出迎えるためである」と。(HA13, 323; 潮 14, 313 参照。)内部にないわけではなく、外部にあるものによって内部のものが触発されて、内部のものが形成されて、外部のものを見ることができるようになる、ということです。つまり、「公然たる秘密」は、常に顕在していながらも見る目がなければ見えない、見る目を養うことなく、目が閉じていては見えないということです。ついでに申し上げますと、次のような詩句が『ファウスト』にあります。「霊の世界は閉ざれたるにあらず、／汝が耳目ふたがり、汝が心、死したるなり！／弟子よ、起て、たゆむことなく／土くれにまみれし胸を朝焼けの紅き光に洗え！」と。(HA3, 22; 潮 3, 21 山下肇訳) これもまた同じ内容を示唆しているといえましょう。色彩論にも、「目が太陽と同じ性質を持っていなかったら、／どうやって、われわれは、光を見ることができよう。／神自身

の力が、われわれの内に生きていないなら、／どうやって、神的なものが、われわれを魅惑することができよう」という詩の文言が続いております。ここでゲーテは、古代の神秘主義者としてプロチノスを示唆しています。また、「われわれは古代イオニア学派——ソクラテス以前の哲学者であるパルメニデスとエンペドクレスを指します——を思い出す、彼らはく同じものによってのみ、同じものが認識される>ということ、きわめて意義深く常に繰り返した」とも表現されています。(HA13, 324; 潮 14, 313 参照)

また短いエッセイでゲーテは、「常に創造する自然の直観を通じて、自己を自然の諸生産への精神的参与に相応しいもの」(HA13, 30f. 潮 14, 11 参照)にすることが肝要である、と述べています。ゲーテは彼の『色彩論』が普及しないことに関連し、次のように語ります。「単純な原現象を取り上げ、それをその高い意義において認識し、それをもって活動するには、様々のことを見渡すことのできる生産的精神が必要である」と。(Houben 383; 対話 (中) 307) こうした基本現象である「単純な原現象」をその「高い意義において認識する」には、それを象徴的に受けとめるだけの自己育成が必要であることです。『植物変態論』も『色彩論』も出版当初は、ほとんど注目を浴びなかったのですが、次第にその価値が認められ、「形態学」は、ゲーテを持って嚆矢とするとされるに至るわけです。

繰り返しになりますが「内部にあるものは外部にある」、「内部の光が外部の光を出迎える」あるいは「同じものによってのみ同じものが知覚される」ということによって端的に表現されておりますように、内部と外部の相即のあり方が語られておりますが、それはまた、「どの新しい対象も、よく観察されるなら、新しい器官をわれわれの内に開く」(HA13, 38; 潮 14, 17 参照)と語られますように、自然の生産的活動に倅ることのないように主体の側の育成を行い、「聖なる公然の秘密」を見る「精神の目」を養い、「実在的なものの真理にたいする想像力」(Houben127; 対話 (上) 211 参照)を働かせ、諸現象の相互連関の内に基本現象を直観することの意です。すでに触れましたように、それは単純な現象の記述ではなく、いわば単なる現前の現象を超

えたものであり、主体である人間精神による、「精神の目」による「理論化」であり、その意味では「抽象化」ということができます (HA13, 317; 潮 14, 307-8 参照) が、現象の「背後」や「外」を意味しない「世界と精神の総合」であります。このことは、「存在の永遠の調和について、この上なく至福な確証を与える世界と精神の総合」であり、「人間をして、その神に似ていることを予感させる内部から外部において展開する啓示」とも表現されます。(HA12, 414; 潮 13, 257 参照) 「現象の背後に何も求めてはならない。現象そのものが理論」である (HA12, 432; 潮 13, 276 参照) というのもこうした関連で理解されるわけです。

こうした自然観察における主体と客体の相即の関係を、心理学者ハインロートは、かつて「対象的」思考と呼びました (HA13, 37; 潮 14, 16 参照) が、ゲーテは、自己の思考のあり方が「対象的」と呼ばれたことに鑑み、その意味するところへの反省的考察を通じて、自然研究、ひいては詩作活動に通底する自己の直観の特徴的な本質を、先に紹介した「多くのことを引き出す」「含蓄ある点」への努力として自覚するに至ったのです。

さて、「認識の最も内奥の根底、つまり、目に見え、把握できる形態において認識することが許されている限りでの事物の本質に基づく」として、芸術の最高形態について語られたことに、ここで再び注意を払っておきたいと思います。ゲーテにとって「芸術」は、「単に考えるだけではなく、同時に感ずるものである」人間、「多様な内的に結びついた諸力の統一」である人間、この人間の全体にたいして語りかけ「人間におけるこうした豊かな統一、こうした統一した多様性」に相応じるものでなくてはなりません (Vgl. HA12, 81) が、また、「認識のもっとも内奥の根底に基づく」最高の芸術は、「人類全体を要求するもの」(HA12, 54; 潮 13, 141 参照) であり、芸術は、「第二の自然、感じられ、考えられた、人間的に完成された自然」(WAI 45, 261) とされます。

こうした芸術における美的形象、それは真理を内包しており、ゲーテにお

ける芸術は、単なる趣味の問題ではなく、認識問題であり、また、認識における美的契機が重要なわけですが、ゲーテは「美とは現現象である」と言いました。「なるほどそれは決してそれ自体では現れてこないが、その反映は、創造する者の精神の種々様々の表現において可視的となり、自然そのものと同じように多様で様々なものである」と。(Houben 468; 対話 (下) 130 参照) 「永遠なるものの一つの意」<sup>こころ</sup>、「真理の意」<sup>こころ</sup>は、「広い芸術の野において働いており」「美によってのみ飾られる」との詩句もまた再度確認しておきたいと思います。ゲーテはさらに、「科学もなんらかの全体を期待しようとするなら必然的に芸術として考えなくてはならない」(WA II3, 121)との確信も語りました。こうした表現は全く唐突に聞こえるかもしれませんが、これは単にゲーテにのみ特有の観想ではありません。ここでこのことの内実を考える上で、20世紀における最大の物理学者の一人であるヴェルナー・ハイゼンベルクを援用したいと思います。

因みに、ハイゼンベルクは、ゲーテの自然研究にも大いに関心を寄せており、例えば『ゲーテの自然像と技術・自然科学の世界』という、ドイツのワイマルならびに日本において行われました講演の中で、ゲーテの「原現象」に言及し、「そうした最も深い連関がそんなにも直接可視的となること、そんなにも公然と顕在していることを、ゲーテは何処から知ることか」と問いかけ、「ゲーテが自然現象の神的秩序として感じているものは、高度の抽象の段階ではじめて、全く明瞭に現れてくるのではないだろうか」と語り、ここにおいて、「価値から自由に」発展してきた自然科学は、ゲーテによって突きつけられている「価値の要求」にも応えうるのではないかとしています。(Vgl.HS 254f.)そして、「すべての自然現象がそれに適い」、したがって、「いわば自然の可能性、存在だけを象徴化しているに過ぎない」彼の主唱する「世界方式」と呼ばれる「基底となる自然法則」は、「数学の言語において定式化され」、「この数学の方程式の最も簡単な解が、様々の素粒子を代表している」と語っています。(Vgl.HS 260f.)<sup>2</sup>

ハイゼンベルクはこれとは別の『精密科学における美の意義』と題する講



演において、認識における「美の意義」をゲートに劣らず強調します。ニュートンの『自然哲学の数学的原理』も、「最高の美の連関」に導かれたものであり、さらに二度、こうした「美の連関」が、「自然科学の歴史において重要な進歩のシグナルとなった」として、「相対性理論」と「量子論」を挙げています。「この双方において、錯綜した個別事象が、長年にわたる成果なき努力の後に、ほとんど突然秩序づけられたのは、なるほどきわめて具象性を欠くが、やはりその実質において単純な連関——そのまとまりと抽象的な美において、こうした抽象的言語を話すことのできるすべての人々を納得させた連関——が浮かび上がってきた時であった」と述べています。(Vgl.HS 295f.) これは、「美的なもの」において「真なるもの」の認識が担われているということの意であり、つまり単純化して言えば、根源的なもの、理念的なもの、ゲートに即して言えば「神的なもの」が、ゲートにおけると同様に、人間に相応しいあり方で、美的構造連関として現れるということができます。そして、「自然科学と技術において、精確な観察と合理的、論証的思考のみが肝要である」とするのは誤解であり、「合理的思考と入念な測定が、自然科学者の仕事に欠かせないのは、ハンマーやのみが、彫刻家の仕事に欠かせないのと同じである。しかし、これらは両者においてただ、道具に過ぎず、仕事の中身ではない」と。(Vgl.HS 304)

因みに、こうして、つまりニュートンの『自然哲学の数学的原理』も、「最高の美の連関」に導かれたものであるならば、とりわけ『色彩論』の第二部「論争編」において、理解しがたいほどに執拗になされたニュートンにたいする攻撃の本質は、どこ求めたらよいのでしょうか。ニュートンは光の分析を目的とし、ゲートは色彩現象の研究をしているのであって、両者の土俵がそもそも違っているとも語られます。また、ニュートンにたいするゲートの攻撃は、「光」を即自存在、神的なものとするゲートにとって、屈折率により数量化し、分解し、しかも合成することに我慢がならなかったことにあったと言えるでしょう。またさらに、このことをアリウスとアタナシウスの宗教論争になぞらえて、『色彩論』においてゲートは、アリウスの三位

一体否定論者の役を演じているといえ、——ニュートンも、神学上はアリウス派でありましたが——こうした事態を踏まえ、A・シェーネが、ゲーテの『色彩論』を『色彩神学』とし、第一部「教示編」を「教義学」とし、その第三部「歴史編」をG・アーノルドの『教会と異端の歴史』（初版1699年、第2版1729年）になぞらえ、ゲーテの『色彩論』における宗教的ポテンシャルティを指摘したのはきわめて啓発的といえましょう。(Vgl. Albrecht Schöne: Goethes Farbentheologie, München 1987)

さて、『色彩論』に関連していえば、「光」そのものは、人間の知覚ないしは認識の対象外であり、光は、闇との作用による「色彩現象」として人間に相応しいあり方で人間の領域内に現れるわけで、そこには人間存在そのものにおける限界が色濃く語られています。『ファウスト』においても、第二部のはじめで、彩り豊かな虹その変転の持続のすばらしさに感嘆しつつ語ります。「あれこそまさしく人間の努力を映し出している。この虹の意味を考えれば、もっとよく理解できる。彩られた反映、そこにこそわれわれの生がある」と。(HA3, 149; 潮3, 148 参照) もちろん、人間の限界の意識は、決してペシミスティックなものではなく、これも、人間の営みには、本源、理念的なもの、一者、神的なものが常に働いているということの比喩でもあり、人間の努力の意義を歌い上げたものとして、厳粛に受けとめるべきものといえましょう。

ゲーテは「原現象」の直観においてにおいて「究極的に満足」しますが、それはまたそこに直観の限界を認め、諦念することであるわけです。このことについて次のように述べています。「私が原現象において究極的に満足する場合でも、やはりそれは諦念である。だが私が人間の限界において諦念するか、私という固陋な個人の仮説的な狭隘さの内部で諦念するかどうかは、大きな相違である」と。(HA12, 367; 潮12, 206 参照) 「原現象」の直観は、決して固定したものではなく、いわば、見る目が肥えて行けば、ますます内実豊かなものとして直観されるわけですが、ゲーテは、このような神=自然の内にある人間の限界に立ち、またそれを意識しながら、「無限なるものへ歩

もうとするなら、有限なる物のあらゆる側面を歩め」(WAI11, 46; HA13, 566; 潮 14, 468 参照) をモットーとし、「自然という書物」を読むことにいそしむわけです。これが、ゲーテの自然研究でもありまた、芸術の創造活動でもあるわけです。『気象学の試み』のはじめには、次のような記述があります。「神と同一である真なるものは、われわれに決して直接認識されえない、われわれはそれを、反映、例証、象徴、個々のまた類似の現象において直観するに過ぎない。われわれは、それを把握しがたい生として知覚するが、やはり、把握したいという望みをあきらめることはできない」と。(HA13, 305; 潮 14, 273 参照)

ところでゲーテは、こうした人間の限界に立ち、それを意識しながら、これもまた彼特有というべき「真理概念」を語ります。「私が私自身ならびに外界にたいする私の関係を知るなら、それを私は真理と称する。こうして各人は、各人自身の真理を持つことができる。だがそれは常に同じ真理である」と。(HA12, 514; 潮 13, 368 参照) 各人の真理といえども、同じ普遍的真理が働いているのであり、その意味で同じ真理であるわけです。認識主体である個々人の立脚点の相違、あるいは個々の文化の違いも含め、それぞれの違いにもかかわらず、それぞれの真理を持ち得る、しかもどの真理も同一の真理を担っており、つまりこれは、端的に言えば、「一なるもの」の現象における「多」であるわけです。

ゲーテの宗教観も、こうした彼の「真理概念」に基づいてより一層理解されるところです。彼は、自叙伝である『詩と真実』の第二部第八章において、「だれしも結局のところやはり、自分自身の宗教を持つものだ」との確信を述べています。(HA9, 350ff; 潮 9, 311-313 参照) これは先ほど挙げました G・アーノルトの浩瀚な『教会と異端の歴史』の読書を直接のきっかけとしたものです。「容易に見て取れるのは、ここに、救済は永遠の昔から決定されているだけでなく、永遠に必然的なものと考えられているということである。そればかりか救済は、生成と存在の全時代を通じて、繰り返し新にされなくてはならないということである」, 「すべての宗教と哲学の歴史が教えている

のは、人間にとっての不可欠の大いなる真理が、様々の時代の様々の国民によって、種々の方法で、それぞれどこか、奇妙な寓話や形象において、それぞれの限界に応じて伝えられたということである」と。イエス・キリストの十字架のもつところの内実は、過去の一定の時期に限定されず、「救済」は、それぞれのあり方で常に新に繰り返されるものであることが示唆されています。この『詩と真実』のこの箇所では、光の天使ルーツィファーの不遜による忘恩、それによる闇の世界とエホバの神々による救済の神話、——これは『創世記』以前の物語ですが——そしてまたそれに続いて現れ、「完全にルーツィファーの役を演じた」人間の忘恩と救済の神話、つまり、「光」から「闇」、そして「闇」から「光」への回帰の神話、ゲーテ特有のいわば「宇宙創生の神話」が語られています。この神話もまた、過去の一回限りの出来事ではなく、現在にまで継続しているこの地上の人間の営みを象徴しているということができるわけです。

こうした観想は、彼の自然研究、とりわけ「光と闇の抗争」としての色彩研究において語られる色彩の世界——これはまた、「色彩神学」とも言われました——とも密接に結びつき、「常に悪を欲し、そして常に善をなす力の一部」、*「光を生み出した闇の一部」*であると自ら語る「常に否定する霊」である悪魔メフィストフェレス (HA3, 47; 潮 3, 44-45 参照) に担われ、世界を駆け抜けていくファウスト、また作品『ファウスト』のハンドルングに繋がることがよく理解されることだと思います。

なお、個々の努力が、やはり「人類共有」の普遍的なものへの努力であり、またそうあってしかるべきであるように、これは、単にキリスト教の相対化であるに止まらないことは明らかです。ゲーテは1780年代、未完に終わった宗教的叙事詩『秘儀』(“Die Geheimnisse”)において、普遍宗教の構想を詩的に表現しようとしています。(HA2, 271ff.; 潮 2, 411 以下、及び、HA2, 281ff.; 潮 13, 61-64 参照) これは、J・V・アンドレーエ (1586-1654) の薔薇十字思想を素材としているのですが、「原宗教」の構想と言われます。E・トルントは、この作品においてゲーテは、「それと知ることなく、多くの様々の

特徴描写において、過去 300 年を総括し高めた」とし、次のように述べています。「宗教的努力をなす人間が全く、違った道から、すべての宗教を包括する宗教、原宗教 (Urreligion) において会い見える宗教的共同体を描いている」、「これはディルタイが〈宗教的・普遍的有神論〉と呼んだ世界観の詩的的神話である。つまり、すべての宗教に真理はあるということ、だれしも純粋な、全き真理は持っていないということ、ならびに、神は、大きな、宗教的ならびに哲学的努力において、いたるところ、また常に、働いているという直観である」と。(Vgl.HA2, 705f.)

なおまた付け加えますと、ゲート特有の前掲の真理命題を引き合いに出しながら、E・カッシーラーは文化哲学の立場から、認識問題の課題を論じています。(拙訳 87-88)「自然を考察しようとする角度は、なんら確定した量ではなく、認識目的ならびに認識意思の特殊性において変わる量」であり、ゲートのこの命題は「様々の個人の間接性を示唆している。しかしそれは、諸々の方法ならびに諸々の研究方法の関係にも、少なからず妥当する。それらのいかなるものも、〈絶対的〉対象をそのまま模写するのではなく、現象を見ることの一定の角度のもとに移す。こうした立場の基本的あり方に、様々のカテゴリーが根ざし、それによって各々の特殊な認識方法が、その対象を規定するのである」と。この「個々の方法の各々に、その〈自分自身に対する、また外界にたいする関係〉を規定し、それによって、各々の〈真理〉の圏域を指摘する全体」を打ち立てる課題を、自己の哲学的課題とし前進的、生産的に受け止め、20 世紀を代表する彼の大規模な文化哲学、「象徴形式の哲学」へと結実させていったといえることができます。「現代の精神的関心の多様性と錯綜を問題」とした場合に、ゲートは、「われわれにとって確たる統一、つまり繰り返し方向を定める際の中心であり続ける」と、彼は語ります。(拙訳 41) カンティアーナーであるカッシーラーの広範囲にわたる文化哲学はゲートをバックボーンとして大きな役割を果たしているということは、今では定説となっているといえることができます。

ゲーテは、1817年から1824年にかけて、『形態学のために』と『自然科学一般のために』という二冊の冊子を随時刊行し、これまで取り組んできた自然研究の集約を図りました。刊行に当たっては、各冊子の各一分冊が纏めて一組として扱われ、その『形態学のために』の表紙裏、したがって、こうして刊行された冊子の一番初めとなりますが、そこに次のような文言が記されています。「見よ、彼、わが前を過ぎ行くを、／われそれと知らぬ間に、／彼、姿を変える、／われの気づかぬうちに。／ヨブ記」と。(WAI 7,1) このゲーテの引用を『『形態学』誌において最も注目する」とし、また、ゲーテが引用した「ヨブ記」のもとの文言は、「視よ彼わが前を過ぎ給う／然るに我これを見ず／彼すすみゆき賜う／然るに我之を暁らず」であり、つまり、3行目が異なっていることを指摘し、木村直司氏は次のように述べています。「これらの言葉の出典は、義人ヨブが友人たちの誘惑的な言辭に対して創造主である神の全知全能を語る第九章第十一節である。したがって<彼>と呼ばれている神はもともと汎神論的に漠然とした存在ではなく、真に旧約聖書的に人間のかたわらを歩んで行くように体験されたエホバの神であった。ルターのドイツ語訳でも三行めは<通り過ぎ給う> (und wandelt vorbei) となっている。ところが、ゲーテの引用のドイツ語が<姿を変え給う> (und verwandelt sich) と変えられたことによって、旧約の神は著しくプロテウスのイメージを帯びることになった。それはゲーテにおける神と自然の関係から必然的な変更であるが、たとえ聖書からの引用であっても、彼の自然観がけっしてすぐキリスト教的とは言えないことを示す典型的な例である」と。(潮 14, 542-3 木村直司解説)

なおまた、こうした「ヨブ記」からのゲーテの変則的引用に関しては、さらに同じ表皮裏の上の部分に記載されている「有機的自然の生成と変成」(Bildung und Umbildung organischer Naturen)、これは「第一巻と第二巻の表紙裏」に「掲げられている題辭」です(潮 14, 479「形態学序説」前田富士男訳注参照)が、ここに注意する必要があります。これと上記のヨブ記からの変則的引用の二つが相俟って、ここにゲーテ特有の神＝自然のダイナミズ

ムが明確に示唆されていると共に、そこに内在する人間の創造的な活動一般にたいして、——もちろん、自然研究であるにせよ、芸術の創造活動であるにせよ——「聖なる公然の秘密」を見る目を養うことを怠ることへの警句もまた述べられていることが理解できます。すべからく人間の活動がそれに相応しい成果をあげるべきものならば、「耳目ふたがり、心、死したる」ことなく、「霊の世界」は開かれていることに依拠し、常により高い次元で現象を見据え、本質を見抜いていこうとする「精神の目」を涵養することこそが、まさに「創造的人間」の要諦であることがここに示唆されていると言うべきでありましょう。

ところで、最初にあげた『ファウスト』の最終場面を振り返ってみたいと思います。そこでは、悪魔メフィストフェレスと結託して世界を駆け抜けてきたファウストが、「叡智の究極の締めくくり」として、干拓事業を成功させ「自由な土地に、自由な人々と共に住む」という「理想的な世界」を思い描く、明るい広い視野を持つに至ったとすることができます (HA3, 348; 潮 3, 351 参照)、これにたいして、ファウストは、メフィストの手下が彼の墓を掘る音を、干拓事業の進捗の音と錯覚したのであり、ここで思い描かれているのは、やはり「単なる理想」でしかありえないとの解釈も当然なされ得るでしょう。さらにまた一歩進めて、「人間の力で自然を征服してきた誇り高い近代人の営為の象徴」といえる「干拓事業」は、「メフィストがファウストのために用意した最後の、そして最大の罠」ではないかとの解釈も生じます (柴田 327-8 参照)。「自然を制御し、人間の意志に従わせようとする近代の指向」、「その賞賛すべき人間の営為」は、「自然にたいする人間の傲慢さによって支えられ」ており (柴田 329)、それ故、「罠」に落ち、いわば悪魔の手に帰することになるというわけです。さらにまた、「干拓事業は善であり、同時に悪である」(柴田 329) とされます。この点はそれ自体肯けることかと思われまふ。光には影が、明には暗が常に随伴し、こうした両面性を干拓事業といえども免れることはできず、その意味で「悪魔の手が働いている」ことは、ゲートには自明のことでありましょう。しかし、『ファウスト』

の終わりで描かれている干拓事業自体が、即メフィストによる「最大の罨」、あるいは「自然にたいする人間の傲慢さ」とは、なかなか考えにくいのです。確かにゲーテが近代科学技術の進展にたいして、折に触れその負の要素を危惧したことは、彼の作品中にも表現されておりますが、科学技術そのものを全く否定するというものではありません。それは、本日、これもはじめにお話した「パナマ運河やスエズ運河の完成」を見るためならばさらに50年ほどがんばって生きるのも、それなりのし甲斐があろうとのゲーテ自身の言葉にも覗えるところでしょう。

ゲーテ時代においては、予想することさえできなかったほどの展開をみせた科学技術に依存する現代社会に直面したら、ゲーテは何を語るでしょうか。まずもって、人類はなんと貪欲であるのかとの驚きは禁じえないでしょう。技術文明の肥大化は、技術文明が諸刃の剣であること、その明と暗をかつけないグローバルな規模で露呈し、自然と人類の調和ある関係も破綻しかねない事態です。しかし、この科学技術なしには、現代の文化・文明社会はもはや存立できないわけで、そこに生じる諸問題にあくまで前向きに対処するよう迫られているといえましょう。個々の文化圏の諸問題は、もはや個別の問題であるに止まらず、それは人類全体にたいする問題提起となり、その解決も、グローバルな「世界文化」の地平において、広い交流を通じて果たされ得るものであります。そして、人類はそう簡単に「悪魔の罨」に陥るわけにいかない、「悪魔の手」に帰してしまうわけにはいかないのであって、個々の地域、個々の文化の利己的な損得を越えたグローバルな共属性の意識を持って対処することが要求されているといえましょう。そして、確かな足取りで、いかに暗闇が迫ってこようとも、ひたすら光へと向かっていくのが、まさしく創造的人間ゲーテの本領であるといえましょう。<sup>3</sup> こうした世界的、全人類的視野を持って、諸問題にあくまで前向きに、「光」を求めて創造的に向かっていくべきであるとするゲーテの志向は、「聖なる公然の秘密」を読み取る「精神の目」を養えという要請の内にも現れていると思われれます。

ご清聴、有難うございました。



註：

本文中ならびに註において、次の略号を用いました。略号に続くアラビア数字は、ページ数を表します。二つある場合は、順番に、巻数とページ数です。

なお、翻訳についても、同様のやり方で、略号を使用しました。講義の際のプリントに記載されている訳文は、訳者名を挙げそのまま使用しましたが、それ以外は、手元にある限り、参考として挙げました。

Goethes Werke (Hamburger Ausgabe): HA

Goethes Briefe (Hamburger Ausgabe): HAB

Goethes Werke (Weimarer Ausgabe): WA

Johann Peter Eckermann: Gespräch mit Goethe, hrsg. von H.H.Houben, Wiesbaden 1959:  
Houben

Thomas Mann: Goethes Laufbahn als Schriftsteller, Fischer Taschenbuch Verlag 1982:  
ThM

Werner Heisenberg: Schritte über Grenze, München 1973: HS

潮出版社版ゲーテ全集：潮

『ゲーテとの対話』エッカーマン著，山下肇訳，岩波文庫：対話

『ゲーテを語る』トーマス・マン著，山崎章甫訳，岩波文庫：Th マン

『カッシーラー ゲーテ論集』エルンスト・カッシーラー著，森 淑仁編訳，知泉書館，  
2006：拙訳

『ゲーテ「ファウスト」を読む』柴田翔著，岩波書店，1990：柴田

- 1 この「生成と変成」は、「近代哲学の影響」というエッセイに、「有機的自然の生成と変成 (Bildung und Umbildung der organischen Naturen) を真面目に追究し続けた」と語られるゲーテの自然観の要をなす重要な概念ですが、これについてはまた後に触れます。
- 2 ゲーテの「原現象の直観」も「理論化」でありその意味での「抽象化」ですが、ハイゼンベルクは、勿論このことを承知の上で、「大いなる連関」が、「ゲーテの意味において直観されるかどうかは、われわれが自然にたいしていかなる認識手段をもって歩み寄るかにかかっている」と述べ、ゲーテにおける「直観」との違いを、「認識手段の違い」とし、この講演の終わりで、次のように語っています。「われわれは、今日もなおゲーテから次のことを学ぶことができるであろう。一個の器官のために、合理的分析のために、他の一切の器官の働きを妨げてはならないということ、われわれに与えられている、あらゆる器官をもって現実を把握し、この現実がまた、本質的なもの<一なるもの、善なるもの、真なるもの>を反映しているということに頼ることがむしろ肝要である」と。(Vgl.HS 262)

- 3 『ファウスト』の終わりで、悪霊の一つ「憂い」が、ファウストに忍び寄ると、ファウストは次のように語ります。「悪霊たちを振り切るのが難しいことは承知している／霊とのきつい絆を断つことはできない／だが、憂いよ、忍び寄る大きなお前の力、／わしは、それを受け入れはしないぞ」と。そして、「憂い」により盲目とされた後でも、次のように語っています。「夜が、ますます深く、迫りくるように見える／しかし、心の内には、明るい灯りが輝いている」と。(HA3, 346; 潮3, 349 参照) ここに、周囲の暗闇が色濃くなろうとも、あくまで「光」を求めるファウストの精神的営為の本質を、かけねなく認めることができます。